



有限会社原田左官工業所
代表取締役社長

はらだ むねあき

原田 宗亮さん

1974年、東京都生まれ。部品メーカーでの営業を経て、2000年に父が経営する原田左官工業所に入社。2007年に代表取締役就任。女性の活用を進め、現在は現場で働く女性スタッフは10名を超える。左官職人を短期間で育成するモデリング育成を導入して目覚ましい効果をあげ、NHKの取材を受けるなど注目された。提案型左官業をコンセプトに、オリジナリティあふれる手法で、左官の世界に新風を巻き起こしている。東京都の左官職組合連合会の理事なども務め、建築業界内で若手を育成するための任意団体も設立する。著書に『新たな“プロ”の育て方』(クロスメディア・マーケティング)など。

【写真】 安岡 嘉

職人の世界で女性を活かし 建築界を革新する提案型の左官会社

【取材・文】 原 正紀

株式会社クオリティ・オブ・ライフ代表取締役・高知大学客員教授・成城大学非常勤講師。中小企業診断士。早稲田大学法学部卒業後、大手メーカー、株式会社リクルートでの勤務を経て、独立。産学公個に対し、採用・育成・人事制度構築など、人材関係の幅広い提案を行う。著書に『採用氷河期』(日本経済新聞出版社)、『優れた企業は日本流』(扶桑社)、『インタビューの教科書』(同友館)など多数。



経営者取材を長く続けているが、職人の親方は初めてだ。

世の中の仕事は、ブルーカラーとホワイトカラーの2つに分類される。それぞれ大事な仕事であるにもかかわらず、ホワイトカラーのほうがフォーカスされがちである。

原田さんは、左官という職人の世界に、女性のチームを組み入れたことで知られる人だ。建築業界の長い歴史において、画期的な出来事ではないか。

本社のショールームに足を踏み入れた瞬間から、私の左官に対するイメージは大きく変わっていた。

左官は室内環境とデザイン性が魅力

原：左官というお仕事は、読者の方もあまり詳しくないと思います。まずはお仕事のこと、業界のことなどをお話いただけますか。

原田：ざっくり言うと、左官とは道具を使って何かを塗る仕事です。よく「壁塗り」と言われます。もちろん壁だけでなく、天井も床も階段なども塗ります。塗装との違いは、厚みでしょうね。少なくとも2.3mm、厚いときは2cmほどまでコテを使って塗ることができる。それによって立体感や質感が出るんです。まさに職人の技の世界なんですよ。

昔はとび職、大工、左官といえば建築における重要な職種でした。でも、今は乾式工法といって工場で作ったパネルを、建築現場で組み立てれば家は出来上がります。家の中も石膏ボードという板を立てて、そこにビニールクロスを貼れば出来上がりです。和室には聚楽調クロスなどもありますから、別に左官が塗らなくても和室ができてしまうんです。

原：いわゆるユニット工法ですね。

原田：そうです。昔ながらの左官の仕事はどんどん減っていますが、見直されているのは機能性

です。昔からある土壁や漆喰壁には、湿気を吸ったり吐いたり、臭いを吸着したりなど、室内環境を良くする効果があると注目されています。

もう一つ、左官が再評価されているのは、人の手で塗って仕上げられるので、いろいろな模様をつけられることです。カスタムメイドにより多様な表現ができるデザイン性が注目されているわけです。新しいアイデアやデザインが取り入れやすいところが評価されています。

原：新しいデザインも職人さんが手がけるのですか。

原田：我々は職人なので、「こんなことができる」ということはたくさん知っていますが、デザインは設計士さんに任せています。建築がユニット化されて全体的に値が下がっており、家を造る人にとっては左官は割高になってしまいました。ですから、お金をかけても良い家にしたいという人、一部屋だけでも漆喰の壁にしたいという人がお客様です。簡易なビニールクロスの4倍ほどのコストがかかりますが、部屋数を抑えれば数万円をプラスすれば1ランク上の機能が手に入る。健康にも良いと言われていいますから価値があります。

続きは雑誌で